21世紀の日本社会のあり方とリスクへの備え

酒　井　泰　弘

Ⅰ　敗戦から20世紀末まで本――日本社会の劇的な変化

Ⅰ．1　敗戦直後の日本社会――美空ひばりの「東京キッド」

「歌も楽しや　東京キッド　　いきでおしゃれで　ほがらかで
　右のポッケにゃ　夢がある　　左のポッケにゃ　チュウイン・ガム
　空を見たけりゃ　ビルの屋根　　もぐりたくなりゃ　マン・ホール」

この詩句は，昭和の歌姫といわれた美空ひばりの名曲「東京キッド」の第１節である。作詞は藤浦洸，作曲は万城目正であり，1950年７月に発売された。1950年といえば，敗戦後まだ５年目であり，人々の生活はともかく貧しかった。日本はアメリカなどの連合国によって占領され，背の高い進駐軍の兵隊が町のそこあそこを闊歩していた。「占領国日本」（occupied Japan）というラベルの付いた製品が町工場で作られ，外国に輸出されていた。

「国破れて山河あり」という。日本は戦争に破れ，美しい山河のみが残った。戦後の人々の生活は貧しく，焼け野原の雑草や，河川の小魚が食卓の材料になることが少なくなかった。都市生活者は田舎の親戚を頼って，いわゆる「買出し」に出かけた。この買出しでは，親の形見のように大切な衣服が僅かばかりのコメと物々交換されることも稀れではなかった。そして，コメの買出しで疲労困憊した人々を終着駅で待ち構えていたのは，「経済警察」による点検と没収だった。当時においては，コメは重要物資として統制下に置かれ，政府による配給以外のルートでヤミ売買することは禁止されていたのである。ある裁判官にいたっては，インフレの下で安い俸給だけでは最低限の生活すらできず，さりとてヤミ売買にも手を出すことができず，栄養失調にかかり餓死してしまった。

当時の窮状については，次のような新聞投書が大変雄弁に物語っている。

「いま思い出しても胸がジーンとなります。敗戦の年だったでしょうか。おコメを探しても全く見えない菜っ葉ばかりの食事。

土手の草を探り，ドングリを粉にして団子に丸めて食べました。おなか空いて，水を飲む毎日でした。よく生きていたと思います。

山へ行き，ツツジの花を兄と食べました。甘い香りがしました。川へ行き，潜って刺して焼き魚を食べました。つらいつらい時代でした」（『朝日新聞』2001年11月１日，「声」欄，静岡県の主婦，64歳）。

小生自身は当時は大阪に住んでいたが，この主婦と似た体験をした。だが，こういう荒廃と貧困の中にあっても，人々は決して夢を失わなかったのだ。暗い世相の中で，むしろ明るい歌が流行るものである。美空ひばりの「東京キッド」は，そういう明るく，夢のある流行歌の１つであった。右のポケットには，「今日は苦しくても，明日はきっと良くなるぞ」という夢と希望がある。しかし，人間は生きて行かなければならないから，左のポケットにはパンやガムがあるのだ。夢とパン――この２つのものは，人間の生活をゆたかにするために常に不可欠なものである[1)]。

Ⅰ．２　経済大国と安全社会の同時実現

あれから早や50年以上の星霜が流れた。「歳月人を待たず」という。私の実感として，50年程度の年月というのは，今は亡き父親が口癖のように言っていたように，「あっち向いて，こっち向いているうちに過ぎていく」ようである。

日本の経済社会は戦後の灰燼の中から不死鳥のように復活し，1960年代後半から高度成長が始まり，1980年代には世界第二の「経済大国」の地位にまで昇りつめた。しかも，日本は欧米の先進国と異なり，例外的な「安全社会」であったことは特筆に値する。日本は経済的に豊かであり，夜も女性の一人歩きがで

1）ちなみに，「東京キッド」は第２節の歌詞は次のようであり，「夢と希望」がやはり巧みに織り込まれている。

「歌も楽しや　東京キッド　　泣くも笑うも　のんびりと
金はひとつも　なくっても　　フランス香水　チョコレート
空を見たけりゃ　ビルの屋根　　もぐりたくなりゃ　マン・ホール」

きるようなリスクの少ない，理想的な社会を実現したのだ。

山本七平（1921–91）は出版業を営みながら，自らの戦争体験とシベリア収容所生活を土台に独自の「日本人論」を展開した希代のマルチ人間であった。ここで，山本氏がイザヤ・ベンダサンのペンネームで執筆した名著『日本人とユダヤ人』（1970年）を少し紹介したいと思う。

この名著は興味深いエピソードから始まっている。そのエピソードとは，ニューヨークの高級ホテルの一室をマンション代わりに使用しているユダヤ人夫婦のことである。彼らは貧乏人家族ではないが，生活ぶりは非常にシンプルであり，持ち物もいたって質素である。その鮮やかなコントラストを不思議に感じた日本人はある日，ユダヤ人夫婦に対して次のような質問を発した。

「あなたがた御一家は，どうしてこのホテルにお住まいなのですか。ここの部屋代その他を考えますと，ここより郊外の快適で立派な住宅のほうが，もっともっと豊かに楽しい生活ができるでしょうに」

これに対するユダヤ人の解答は，日本人にとって全く想定外のものだった。

「ここは安全ですから。安全にはコストがかかりますよ。もし生命を失えば，郊外の豪邸も贅沢な生活もすべて無意味になってしまいます。自分の生命の安全を第一に考えて，この安全のためには，たとえ他の支出を削るだけ削ったとしても，それは当然のことではないでしょうか」

日本人とユダヤ人――この両国民は似ている点があるが，違う点も相当にある。私自身，ユダヤ人の友人を数多く持っている。私がアメリカの大学院に留学した1960年後半においては，クラスでトップの成績を争うのは常に，日本人かユダヤ人であった。日本人もユダヤ人も，実に真面目で，よく勉強した。私自身のことは別にして，ユダヤ人の友人の中には，ハーバード大学学長やシカゴ大学学部長の要職を勤めた人間も出た。それから1970年代前半には，私はアメリカの大学の教壇に立つことになったが，同僚の優秀な教授の多くはユダヤ人であった。

ところが，日本人とユダヤ人の間には，決定的に異なる点がある。その点とは，山本七平氏によれば，生命の安全に対する態度である。日本は「安全と水

がタダの国」であるが，ユダヤ人は多額の金額を支払ってまでも生命の安全を確保しようとする[2)]。

今になって振り返ってみれば，アメリカ時代の私自身は，脳天気の典型的な日本人であったようだ。実際，上述のユダヤ人夫婦と違って，高級ホテルをマンション代わりに使用したことはないのだ。私が借りていた家は，大学に比較的近い普通のアパートだった。その結果は恐るべきものであって，家に泥棒に入られること３回，クルマを盗まれることも３回という散々たるものだった。ある時には，事情聴取にきた警察官はしょげ返った私に対して，次のような奇妙な慰められ方をした。

「やあ，君は日本人なのだね。今晩，泥棒に入られたようだが，そんなにションボリすることはないさ。君，テレビやカメラが盗まれても，千ドル程度のおカネが無くなったところで，あんまり落胆するなよ。もっともっと大切なものが残っているのだからね。その大切なものとは，君自身の生命なのだよ。現に生きているということ――それが一番大事なポイントなんだ。

それにしても，実をいうとね，俺は日本に〈良い思い出〉をいっぱい残しているのだ。十年程前に，横須賀に上陸したことがあるのだが，その時の楽しいことといったら……」

私は今になっても，この時に交わした警察官との会話が忘れられない。30年前の日本は，世界の中で例外的に「安全な社会」であったのだ。水や空気は，コストの要らない「自由財」だった。それと同様に，安全や安心さえも自由財に近い存在だった。要するに，日本は世界に冠たる安全国家であるという「安全神話」が生きていたわけである。

Ⅰ．３　大事件の続発と「安全神話」の崩壊

山本七平氏が他界してから，早や15年の歳月が流れた。この間，日本の水道水は生のままではだんだん飲まれなくなり，ミネラル・ウォーターのボトルがスーパーやコンビニで売れ筋の商品となってきている。日本でも外国並に，飲

2）この点に関して，山本七平氏は次のように見事に表現している。
「ああ，日本人は何と幸福な民族であったことだろう。自己の安全に，収入の大部分を当てねばならなかった民と，安全と水は無料に手に入ると信じ切れる状態におかれた民と――私たちはただ溜息が出てくるだけである」

み水に一定のコストを払うのが常識になりつつある。

そればかりではない。20世紀末にはそれこそ「世紀末的な大事件」が続々と輩出し，日本の「安全神話」は根底から揺らいでしまった。その幾つかの事件を取り上げてみよう。

第１の事件は，1995年１月17日午前５時46分，神戸・芦屋・宝塚・淡路島北部地区に発生した「阪神・淡路大震災」である。これは震度７という巨大地震で，死者は５千人以上，負傷者は３万人以上を数えた。私は学生時代に神戸市に下宿生活を送っていたが，神戸の思い出といえば，秀麗な六甲山と清澄な神戸港であった。「神戸は住むのにいい都会ですよ。地盤が堅く，地震などとは全く無縁な所です」という下宿の若奥様の言葉には，妙な説得力を感じたものだった。ところが，関東大震災以来，実に半世紀年振りの大地震である。

かの高名な寺田寅彦博士（1878–1935）は，かつて次のように述べたことがある[3)]。

「地震や津波は新思想の流行などには委細かまわず，頑固に，保守的に執念深くやって来るのである。……二十世紀の文明という空虚な名をたのんで，安政の昔の経験を馬鹿にした東京は大正十二年の地震で焼き払われたのである」

第２の事件は，1995年３月20日に発生した「地下鉄サリン事件」である。この日の晴れ上がった早朝に，東京の地下鉄「霞ケ関」駅の構内で，猛毒のサリン・ガスが散布された。犯人グループは狂信的な宗教集団に属しており，この世に「ハルマゲドン」が到来することを自作自演したものであるという。霞ケ関駅だけでも２人が死亡，231人が障害を受けた。何よりも痛ましい事実は，この宗教集団の指導者の多くがトップクラスの大学の卒業生であったということだ。頭脳の発達と情緒の発達とは無縁であり，両者はむしろ反比例するのだろうか。

３）寺田寅彦博士は，名作『天災と国防』（1934年）の中で，次のようにも述べておられる。「悪い年回りは，むしろいつかは回って来るのが自然の鉄則であると覚悟を定めて，良い年回りの間に十分の用意をして置かなければならないということは，実に明白すぎるほど明白なことであるが，またこれほど万人がきれいに忘れがちなことも稀れである」
有名な文句「天災は忘れた頃にやって来る」は，上のような文章を適当に縮めたものであろうと思う。

以上の２つの事件は1995年の前半に起こったが，それ以後世の中は比較的落ち着いてきた。そこで多くの人々は，「やれやれ，これで悪魔払いができたようだ。今世紀最後の５年間は静かな生活をしたいものだよ」と期待していた。ところが，20世紀も押し詰まった1999年から2000年にかけて，とんでもない大事件が続発することになったのである。

上の第２に続く第３の事件は，1999年９月30日，茨城県東海村にある民間ウラン加工施設 JCO で発生した「臨界事故」である。放射能漏れによって２名が死亡し，工場に働く人や住民の多数が被爆した。被爆・後遺症というような直接被害だけでなく，観光・ビジネスに影響が出るというような間接的な「風評被害」も相当に出た。早速に事故の原因の調査ということになったが，驚くなかれ，裏マニュアルの存在と飛ばし作業，またバケツで手作業を行うというような一連の人為的ミスが明らかになった。そのために，東海村は「日本一の原子力の村です」という大きな立看板を外さざるをえなくなり，隣接の大洗町の料理屋では観光客が激減してしまった。

第４の事件は，2000年３月８日，営団地下鉄日比谷線の中目黒駅付近で起こった「脱線衝突事故」である。下り列車の最後尾車両が突然に脱線し，対向線側にはみ出したために，反対方向から来た上り列車の５，６輌目に激しくぶつかった。この衝撃によって，３人が死亡，数十人が重軽傷を負った。安全とみなされていた通勤電車が一瞬のうちに凶器と化したわけである。「地下鉄は最も安全で便利な交通手段」という神話が，この事件によって一瞬に崩壊してしまった。

第５の事件は，2000年６月末から７月にかけて発生した「牛乳食中毒事件」である。もっと具体的に述べると，業界トップメーカーの雪印乳業の大阪工場で製造された低脂肪乳が原因で，１万人以上の人々が食中毒にかかったという大事件である。この事件においては，賞味期限が大幅に切れた乳製品を加工品の原料として再利用したり，気温30度の炎天下でバケツの手作業を行うなど，リスク管理のお粗末さがはっきり出てしまった。亡くなった長身の親父は幼い時から牛乳が大好きで，「牛乳は完全食で体に良いよ，牛乳を飲むならメーカー

の雪印に限るね」と口癖のように言っていた。この親父は天国においても雪印マークの牛乳をおいしそうに飲んでいるだろうか。

第１の事件の大地震は自然災害ということで別に論じるとしても，残りの４つの事件の背後には，共通の事情が横たわっていることを忘れてはならない。その事情とは，人があまりにも「効率性」や「経済性」を追求したために，「安全性」や「公平性」を軽視しがちだったということである。科学技術が発展すればするほど，人災リスクはむしろ増大するだろう。機械の発達は，その盲信という副作用をも生み出すのだ。人間は一見壮大な現代技術に圧倒されるあまり，初等的な「ヒューマン・エラー」を犯しやすい。リスクは決して侮ってはならないのである[4)]。

Ⅱ　21世紀の幕開けは「大動乱」の前兆か

Ⅱ．１　狂牛病と日本政府のリスク対応

2001年１月１日――我々は20世紀にお別れし，新しい21世紀に突入した。私はこの記念すべき元旦の朝に，次のような一連のことを考えた。

21世紀とはどういう世紀になるのだろうか。天災リスクや人災リスクは増大するのだろうか，それとも減少するのだろうか。

有名な俳句に，次のようなものがある。

「去年今年　貫く棒の　ごときもの」

新世紀は上の俳句と同様に，旧世紀の単なる延長線上にあるのだろうか。

その答えは，今までのところ肯定的であるようだ。案の上というべきか，21世紀に入るやいなや，我々は未曾有の大事件に見舞われている。世紀末事件は世紀末に止まることがなく,貫く棒のごとく新世紀初めにも続発しているのだ。21世紀の幕開けは,「ハルマゲドン」とは言わないまでも，来るべき「大動乱」の前兆なような気配すらしている。

私見によると，現在の日本社会で恐らく最も深刻な事件は，いわゆる「狂牛

4）リスクの存在とヒューマン・ファクターの関係については,「参考文献」の中の一連の拙著を参考にしていただきたい。

病の発生」である。狂牛病に汚染された牛は，はるかな島国イギリスで十年前に発生し，何十万頭という数の牛が焼却処分された。もう１つの島国の日本の多くの人々は，イギリスの狂牛病問題をいわば対岸の火事のようにみなし，最悪の場合でも「お上」が水際で手際よく処理してくれるものと考えてきた。

ところが，管轄の厚生労働省のリスク管理は万全どころか，失敗だらけのものだった。専門家の話によると，狂牛病によって最も汚染されている部位は脳，脊髄，目および回腸であるという。厚生労働省は，日本で狂牛病第１号の牛が発見された後も，強制力のない「自主回収」を発しただけで，疑わしい食肉がほとんど野放しに流通するのを黙認していた。これは，かつての「エイズ事件」の際に，問題の非加熱製剤の回収が遅れたために，深刻なエイズ問題が発生した事情とよく似ている。いまや，人々は牛肉を食べるのを恐れ，焼肉店やハンバーガー店に寄りつかない有様である。

問題をさらに深刻にするのが，「肉骨粉」の無断流通である。「肉骨粉」といわれる部分は，危険部位の脳髄を粉々にして作ったものであり，牛・豚などの家畜の飼料になるほか，「肉エキス」としていろいろな食料の成分になる。この十年間，疑わしい肉骨粉がイギリスから日本へ「威風堂々」と輸入されていたと聞いて，リスク管理の杜撰さに呆れるばかりである。

驚くべきことに，肉エキスは御馴染みの食品にまで黙って侵入している。私は子供の頃よりカレーライスが大好きな人間だが，カレー味をよくするために肉エキスが愛用されているのだ。また，肉エキスはラーメン，サラダのドレッシングや肉の「たれ」にも使用されている。過日，私が家内と一緒に，近所のスーパーに買い物に行ったところ，レトルトのカレーやラーメンの袋に表示してある成分表をまじまじと凝視する主婦の方々を目撃した。

焼肉や牛丼は食べては駄目，ハンバーガーやソーセージも駄目，カレーやラーメンも駄目となると，事態はまことに深刻といわなければならない。とくに，育ち盛りの子供の旺盛な食欲を満たすには，もはや「ミッション・インポシブル」と形容できるほどの状況である。

こういう事態に至っても，日本の役所のリスク対応はその場限りのものであ

り，形だけでお茶を濁す傾向があるようだ。先日は，担当大臣が記者団の眼前で，目を白黒させて300グラムのビーフを頬張っていたが，実に滑稽な光景である。どうやらこれは役所が「安全宣言」を出すための儀式のようなものらしいが，その宣言を出す寸前に狂牛病「疑陽性」の牛が発見されたために，「牛肉パニック」がむしろ拡大してしまったのは皮肉の極みである。

そもそも「狂牛病」という呼び名がおかしいという。牛は別に狂っていない。病原体プリオンの作用によって，発病した牛は手足が麻痺し，歩行が困難になっているだけだ。正確には，「牛海綿状脳症」（BSE）と呼ぶべきである。実際のところ，もし仮に脳溢血のために歩行困難になった人を「狂人病」にかかっていると呼べば，まさに人権問題となるだろう。

世界的なウイルス学者の山内一也博士（元東京大学医科学研究所教授）によると，「狂牛病」なる病気は牛のくず肉や骨をえさとして与える「共食い」を強いたことで発生した病気である。したがって，加害者はむしろ人間のほうだということになる。我々は山内博士の次の名言を肝に銘じておかねばならない。

「効率だけを追求してきた現代社会の仕組みを見直す時に来ています」（『朝日新聞』2001年10月29日の取材記事より）。

Ⅱ．2　同時多発テロとバイオ・テロ

2001年９月11日，「世界が変わった」とされる。世界が変わったというのは大袈裟すぎるようだが，アメリカの人たちの狼狽ぶりを見ていると，「アメリカが変わった」ことは間違いないところだろう。実はこの日，アメリカの繁栄を象徴するニューヨークの摩天楼が，テロリストにハイジャックされた旅客機に突っ込まれ，無残にも瓦解した。

私自身，あの恐ろしく高くも何か冷たい感じのするツイン・タワー（正式には，世界貿易センタービル）には３度ほど訪れたことがある。摩天楼の屋上からはるか下界の道路を見下ろすと，歩行者はけし粒のように矮小な存在だった。「あのちっぽけで，のろのろ動くものが，本当に人間なのだろうか？」と何度も訝った。

それ以来，アメリカのマスコミ，とくにCNN放送は連日連夜，この悲惨なテロ事件を報道している。ブッシュ大統領は「これは戦争行為だ！」と宣言し，アフガニスタンのタリバン政権への「報復攻撃」を続けている。世界の最強国がアジアの最貧国にミサイルや大型爆弾を落とす光景は，あまりにも痛ましい。私はふと，今から55年前の1945年３月，爆撃機Ｂ29が落とす焼夷弾の嵐の中で，命からがら大阪市内を逃げまわった時のことを思い出した。異常な幼児体験はなかなか消え去らないものだ。

ニューヨークのテロ攻撃で，死者は５千人を下らないという。私が体験した大阪大空襲ではほぼ十万人の死者と百万人の被災者が出たわけであるから，５千人という数字は比較的に「少数」であるかのようである。だが，これまで本土への無差別爆撃を経験したことのないアメリカ国民には，５千人は「耐えられない多数」なのだろうか。人が激怒しパニックに陥る「臨界点」の数字は客観的に決まるものではなく，その国の歴史や風土によって左右されがちなのである。

アメリカの人々が同時多発テロの恐怖から覚めやらないうちに，もう１つのテロが発生した。それが炭疽菌による「バイオ・テロ」である。事件の発端は，炭疽菌２グラムを入れた封筒がワシントンの郵便局に届いたことから始まった。そのために，郵便局員が恐ろしい肺炭疽を発病し，数日後に死亡した。これまでのところ，ワシントンの政府機関を中心に多くの炭疽菌汚染箇所が見つかっているが，それ以後にニューヨークの一般人の肺炭疽が確認され，さらにははるか遠くのリトアニアのアメリカ大使館にまで汚染が広がっていることが分かった。

バイオ・テロは，「貧者の原爆」ともいわれ，原水爆に匹敵するほど強力である。しかも，それは飛行機を使ったテロと異なり，姿の見えない分だけ始末に困るのだ。アメリカの国土安全保障局長の話によると，菌の出所は依然として不明である。微生物学の知識を持つ誰かがアメリカ国内で培養したのか，それとも何処か他の国の仕業なのか，その結論がいまだ出ていないようである。バイオ・テロは全世界にますます拡大するのだろうか。世界の人々は「見えな

いリスクと恐怖」の中で生きていかなければならない。

Ⅱ．3　リスクと不確実性の時代

このように，21世紀の幕開けは「大動乱」の前兆かのように不気味である。我々は「リスクと不確実性の時代」を迎えている。思えば，1970年代に「リスクと情報の経済学」という新しい学問が誕生し，私もこの分野に関係する著作を多数執筆してきた。拙著を少し挙げると，『不確実性の経済学』(有斐閣，1982年)，『寡占と情報の理論』（東洋経済新報社，1990年)，『リスクと情報――新しい経済学』（勁草書房，1991年)，『保険文化――リスクと日本人』（共著，千倉書房，1995年)，『リスクの経済学――情報と社会風土『(有斐閣，1996年)，『リスク学事典』（共編，TBS ブリタニカ，2000年)，『リスク社会を見る目』（岩波書店，2006年）などがある。

2001年10月10日，ノーベル経済学賞がアカロフ，スペンス，スティグリッツの３名に授与されることが発表された。これらの３人はいずれも私と同世代の学者であり，リスク・不確実性・情報の視点から経済学の「新しい地平」を切り開いてきた旗手たちである。私としては，まことに慶賀にたえない気持ちで一杯だ。

でも，問題がまだ残っている。このリスクと不確実性の時代を迎えて，リスクと情報の経済学がどこまで有効な学問なのか，そこに限界はないのか，限界を乗り越える方向はないのか，等々。そこで，次節では，このような問題に分析のメスを入れたいと思う[5)]。

Ⅲ　リスクと国民性

Ⅲ．1　リスクとは何か

昔の日本においては，次のような言葉が流行っており，相当な説得力をもっていたようである。

「地震，雷，火事，おやじ」

5）リスクと不確実性の経済学について詳しく研究したい人は，酒井泰弘著『不確実性の経済学』を読んで欲しいと思う。

この言葉が教えるように，昔の日本人は地震を一番怖がり，雷や火事を次に恐れ，最後に「雷おやじ」の言動を畏怖してきた。

リスク学の視点から見ると，地震や雷は人間のコントロールが全く効かない「自然リスク」である。実際のところ，1995年における阪神・淡路大震災の発生は，何人が予見できただろうか。予見が不可能であり，その被害が甚大なものになるので，地震は古来から最も恐ろしいリスクと見做されてきたわけである。落雷のリスクも，非常に恐ろしいものである。日本には，神社仏閣や天守閣など，高層の木造建築が多い。歴史を調べると，本殿や五重塔や天守閣が落雷のために焼失した例が少なくない。現在でも，雷神がゴルフコースの上で暴れ出すと，ゴルファーはプレーを即時中断し，避難するにしくはない。

火事は，「自然リスク」でもあり，「人災リスク」でもある。火事にもいろいろな種類があり，地震や落雷に伴う火事は確かに天災だろう。だが，火の消し忘れによる失火や，放火殺人事件にいたっては，明らかに人災である。木造建築の多い日本では，火事の恐怖はとりわけ大きいのだ。

私が子供のころは，おやじの存在は絶大で，「食事中はしゃべるな！」，「ぐずぐずするな！」，「けんかしても泣いて帰るな！」というように，おやじの雷が落ちることは日常茶飯事だった。しかし，現代日本では，雷おやじは「やさしいパパ」にとって代わられた。現代の「人災リスク」の代表例はむしろ，失業・倒産・交通事故・公害・環境破壊などであろう。上述した飛行機テロやバイオ・テロはもちろん，現代の最も恐ろしい人災である。

このように，リスクにも実にさまざまな種類がある。だが，我々は各種のリスクの共通項を摘出することによって，リスクの定義を次のように与えることができる。

「リスクとは，人間の生活維持や社会経済活動にとって〈望ましくない事象〉の不確実性の程度，およびその結果の大きさの程度を意味する。リスクが大きいとは，望ましくないものの発生確率が大きいことや，その被害の程度が大きいことを表わす」

リスクの大小を考える例として，自動車と自転車を比較するとよい。一面において，自動車は自転車と比べて時間短縮に役立つ「便利のよい乗り物」であ

る。また,「自分は高級車に乗っているのだぞ！」というプライド感も満たせるかもしれない。しかし，他面において，自動車は自転車よりも「リスクの大きい乗り物」である。自動車を運転すれば，事故の確率が相当上がるし，事故による被害総額もはるかに大きくなる。

人が自動車に乗るか自転車ですませるか――これは「リスクの下での意思決定」である。「ハイリスク・ハイリターン」という言葉が雄弁に物語るように，人は「プラスのリターン」と「マイナスのリスク」とを比較して，前者が後者を上回るかぎりにおいて，リスクの大きい自動車を選択するだろう。しかし，これはあくまで理論上のことにすぎず，実際における人間の選択行動は必ずしも合理的ではない。個人の選択が,「自動車時代に乗り遅れるな！」という「社会の風潮」によって影響されることがあるかもしれない。さらに，無鉄砲な若者たちの一団が敢えてリスクに挑戦し，深夜に高速スピードで突っ走る傾向があることも否定できないだろう[6)]。

Ⅲ．2　社会全体のリスクと各個人のリスク

私が子供のころの話である。毎年，木枯らしの吹く季節になると，子供会のグループが隊列を組んで,次のように斉唱しながら,隣近所を徘徊したものだった。

「マッチ１本，火事のもと，火の用心，火の用心。
　ネコを蹴っても，コタツを蹴るな，火の用心，火の用心」

昔ながらの木造家屋は趣があるが，火事にとにかく弱い。もし一軒の家に火事が起こると，被害はその家だけにおさまらず，近所一帯が火の海に巻き込まれることになりかねない。そこで，火事というリスクに対しては，一人ひとりの力ではなく，むしろ地域社会全体で対処しようとする。これが伝統的な日本のリスク対策であったのだ。

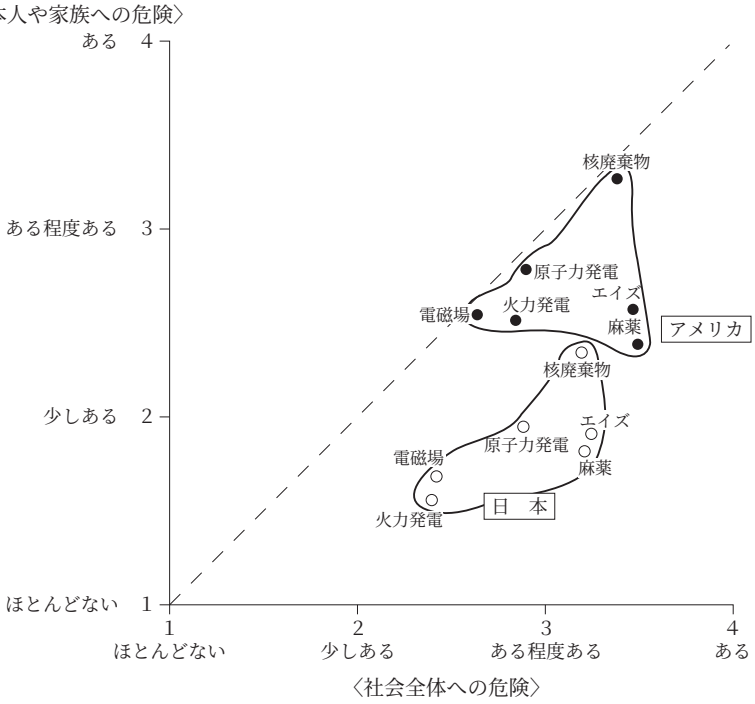
リスクと国民性――両者は日本とアメリカの間で，際立った対照を示す。こ

6）リスクの定義や多様な内容については，日本リスク研究学会編『リスク学事典』（TBSブリタニカ）が有用である。この書物は，リスク学に関する日本で最初の事典である。私自身，日本リスク研究学会の元会長であり，今なお継続して学会理事を務めている。

れに関しては，広瀬弘忠教授（東京女子大学）などの研究グループによる国際的なアンケート調査（1992–93年）の結果を紹介したいと思う[7)]。

図表１を眺めよう。日本およびアメリカで分析対照となった共通のリスク要因は，核廃棄物，エイズ，麻薬，原子力発電，火力発電，電磁場の６つである。興味ある問題は，それぞれの要因について，社会全体の見地でどの程度のリスクがあり，また本人や家族の個人レベルでどの程度のリスクがあるか，という点である。もし各要因について「社会全体のリスク」と「本人や家族のリスク」がほぼ一致すれば，それに対応する点は45度線の近くに位置するはずである。

図表１から読み取れることがある。それは，日本においては，たとえ社会全



図表１　リスク観の日米比較（1992～93年）

7）詳しくは，広瀬弘忠氏の優れた論文「リスクの発想は定着したか」『エネルギー・レビュー』を見られたい。

体でリスクが相当にあるとしても，自分や家族の生活は特別に守られているという「安全保護意識」が非常に根強いことである。これに対して，アメリカは日本よりややリスクの大きい社会であるばかりでなく，本人や家族が個人レベルで各種のリスクに対処しなければならない。

日本人のリスク観は，近年変化しつつある。地域社会や家族間の連帯が弱まる一方で，「自分のことは干渉しないで！」という個人主義の傾向が高まりつつある。しかし，このような傾向をもって，日本人のリスク観が欧米型に一方的に収束しつつあると断定するのは，あまりにも早計すぎるだろう。我々は，早とちりのリスクを回避するだけの判断力を持つ必要があるのだ。

心をじっくり落ちつけて考えてみれば，日本にはアメリカにない風土と歴史があり，これは未来永劫変わらない。日本がアジア大陸の東端に位置する島国であり，森林と河川の多い「瑞穂の国」であるのは紛れもない事実であり，この風土は全く変化しようがないのだ。また，「水戸黄門」や「遠山の金さん」が庶民の味方として活躍するのは，日本独自の精神風土があってのことであり，恐らくアメリカ人には十分理解できないだろう。他方，アメリカの西部劇映画によく見られるように，宿場町の人々が各自武装し，自前の民間保安官を雇用し，悪漢の略奪行為に備えるという姿は，日本人のメンタリティから相当にずれているように感じられる。

すでに述べたが，去る1995年に，阪神・淡路大震災が発生し。５千人以上の人々が死亡した。そのような大災害の最中において，店舗襲撃や略奪・乱闘など，アメリカ流のパニック現象が全然発生しなかったのは，ある意味で特筆すべき事柄である。アメリカ人の友人は，「不思議な国だなあ，日本という国は！大震災の時でも，日本人は礼儀正しいのだから」と大きな目を白黒させていた。

大震災の時に最も有効だったのは，地域住民同士の助け合い運動である。倒壊した家屋の中に閉じ込められた多数の人々が，隣近所の住民たちによって無事救助された。また，炊き出しや励まし合いなど，人々がお互いに救いの手を差し伸べあうことが，現代の日本でも生きているのだ。リスクに対処する社会全体の枠組みというものが――弱まったとはいえ――なお厳然と存在してい

る。

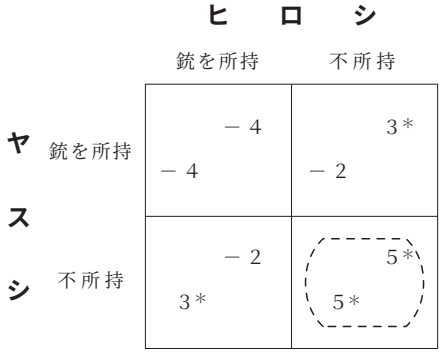
Ⅲ．３　安全な社会と危険な社会――ゲーム理論の視点から

経済学の世界では現在，ゲーム理論が流行している。そこで，ゲーム理論の視点から，リスク対応に関する日米比較分析を試みてみよう。

２つの対照的な社会を取り上げる。１つは，かつての日本のように銃器がなくても社会秩序が守られている「安全な社会」である。もう１つは，アメリカのように銃器の所持がなくては犯罪が多発しがちな「危険な社会」である。断っておくが，このような日米比較はあくまで一般的なモデル分析のためであって，各社会における地域差をさしあたり無視していることに注意されたい。実際のところ，同じ日本社会といっても，大都市の一部では「危険な地域」が存在するし，同じアメリカ社会といっても，地方の田園地帯はおおむね「安全な地域」であるだろう。だが，ステレオ・タイプの分析としては，このように単純化をすることは十分意味があるだろうと思う。

まず，安全な社会において，ヤスシとヒロシという２人のプレーヤーがいると想定する。各人は自分の身の安全のために銃を所持すべきかどうかを思案している。この場合の利得表は図表２のようになるだろう。

まず，安全な社会において，銃を所持することは法的に禁止されており，それでも敢えてガンを所持しようとすれば，経済的にも心理的にも相当のコスト



図表２　安全な社会

が要る。したがって，もしヤスシとヒロシがともに銃を所持しても，「御利益」は全然なく，不法所持罪で摘発される公算が強い（２人ともにマイナス４の利得)。また，もし２人が銃を所持しないならば，各人は安全で枕を高くして眠れるだろう（ともにプラス５の利得)。

もっと興味を引くのは非対称的な状況であり，１人が銃を持ち，もう１人が銃を持たないような状況である。この状況下の銃の摘発率は，前の２人所持の場合よりも低いだろうが，それでもガン所持のコストを支払う必要がある（マイナス２の利得)。この場合，ガンを持たない人は，不法な銃の流通にびくびくしなければならないだろうが，警察力による安全維持に信頼を寄せることができよう（プラス３の利得)。

以上のことから，安全な社会における「銃の所持ゲーム」は図表２のように表わせるわけである。このゲームでは，各プレーヤーのベストの戦略が銃の「不所持」であることは，次のように示せる。

まず，相手のヒロシが銃を所持する場合を取り上げる。この場合には，ヤスシは銃を所持することによって（－４）の利得が得るが，銃を所持しないことによって３の利得を得る。図表の中では，利得３のほうが（－４）より大きいことを星印「*」を付けることによって示そう。このことより，相手が銃を所持する場合でも，本人自身は銃を保持しないほうが得策であることが分かる。

次に，相手のヒロシが銃を所持しない場合を取り上げる。この場合，ヤスシが銃の所持によって（－２）の利得を得るが，銃の不所持によって５の利得を得る。したがって，相手が銃を所持しない場合，本人も銃を保持しないのが賢明である。

以上のことより，ゲームの均衡点は，星印「*」が２つ付いたボックス，つまり（不所持，不所持）＝（５，５）において実現される。この点は個人的にベストの点だけではない。明らかに，それは社会全体の立場から見てもベストの点なのである。したがって，安全な社会では，銃を所持しないことが，個人的にも社会的にも最善のリスク対策となる。

これに対して，危険な社会では銃の所持が法的に許されているから，様相が

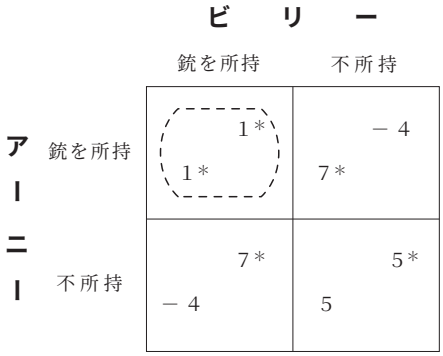
一変せざるをえない。２人のプレーヤーの名前は，アーニーとビリーであると想定する。２人の採用可能な戦略は「銃を所持」と「不所持」である。すると，銃の所持ゲームの利得表は，いまや図表３のように変化するだろう。

一方において，もしアーニーとビリーがともに銃を所持すれば，各人はそれなりに身の安全が確保されるだろう(ともにプラス１の利得)。他方において，もし両人がともに銃を所持しない場合には，余分な出費がかからず，非常に利得が高い（ともにプラス５の利得)。

問題は，１人だけが銃を所持する場合である。この場合には，銃の独占者は心理的に優位に立ち，最高の利得が得られよう(プラス７の利得)。その反面，銃を所持しない者は「相手からいつ襲われるかもしれない」という恐怖感にかられるだろう（マイナス４の利得)。

以上のことから，危険な社会における銃所持ゲームの利得行列は図表３のようになる。以前と同じように，大きい数字のほうに星印「*」を付けていくと，星印「*」が２つ付いたボックスは，左上の（銃の所持，銃の所持）＝（１，１）だけである。もちろん，この升目が当該ゲームの均衡を示している。危険な社会はある意味で疑心暗鬼の世界である。というのは，相手が銃を所持するかぎり，自分も銃を所持しなければ，身の安全が保障されないからである。

このように，危険な社会では，各人は身の安全のために銃を所持するはめに追い込まれる。しかし，このような状態はもちろん，社会全体の立場ではベス



図表３　危険な社会

トの状態ではない。なぜならば，左上のボックスの数字の和２よりも，右下のボックスの数字の和10のほうがはるかに大きいからである。危険な社会といえども，社会の成員がすべて銃を所持しないほうが，はるかにベターなのである。だが，このような社会的にベストの状態が，自動的に実現されないところが，危険な社会のジレンマである。換言すれば，ミクロのレベルの安全策が，マクロのレベルでは最善策ではないことが起こるわけである。

さて，わが日本は安全な社会なのだろうか，それとも危険な社会なのだろうか。かつては，電車に置き忘れたカバンが持ち主に無事戻ってきたり，夜に女性の一人歩きができるほど，日本は平和で安全な国だった。だが，最近の日本の実情を観察すると，かつての安全さはもはや存在しないようだ。事実，東京の都心でサリン事件が発生したり，大学の構内で強奪・殺人・レイプなどの凶悪事件が頻発している。だが，日本では銃の所持は依然として不法であり，その取締りも厳しい。現在の日本は，安全な社会と危険な社会の中間に位置しているとみなすべきだろうか。もちろん，わが日本をきわめて安全な社会に復帰させることが可能ならば，これに勝るものはないだろう[8)]。

Ⅳ　21世紀の社会と真にゆたかな生活

Ⅳ．１　１つの未来像――手塚治虫の「メトロポリス」

私はかつて，本を読むのが大好きな少年だった。「小公子」，「ああ無情」，「怪盗ルパン」，「名探偵シャーロック・ホームズ」など，外国の作品がとくに好きだった。敗戦後，人々の生活は大変苦しかったが，私は毎日のように，近所の貸本屋から借りた古本をむさぼるように読んだものだった。戦後，雪崩のように流入してきた外国文学を読むことによって，少年の私は心の癒しを得ていたのかもしれない。

ところが，これらの外国の名作に負けないくらい，私の心をとらえた日本の傑作があった。それは手塚治虫の SF 科学漫画である。手塚漫画は単に面白お

8）ゲーム理論の視点からの「安全な社会」と「危険な社会」の比較分析については，拙著『リスクの経済学』（有斐閣）や『リスク社会を見る目』（岩波書店）を参照されたい。

かしい劇画ではなく，著者の強力なメッセージを盛り込んだ文学作品だった。

私見によると，初期の傑作「メトロポリス」（1949年）は手塚漫画の最高傑作のひとつであるとともに，後の大作「鉄腕アトム」へと繋る重要な位置を占めている。この傑作の冒頭は大変印象的であるから，以下に紹介しよう。

「ベル博士の話によると，今から60万年も前，巨竜は地球上のあちこちに栄えていたが，大氷河時代が来て絶滅した。それからマンモス象が現れたが，それも発達しすぎた牙のためにかえって滅びてしまった。それに代わって，人間という動物が地上を征服しはじめた。それから何万年も立ち，人間のただひとつの武器〈頭脳の力〉は，この上なく発達し，そして人間の文化はその絶頂に達した」

だが，ベル博士は事態を冷静に眺めていて，こう推論するのだ。

「しかし，いつかは人間も，その発達しすぎた科学のために，かえって自分を亡ぼしてしまうのではないだろうか？」

それから，ストーリーは一変し，「人造人間」ミッチイの誕生秘話へと続くのだ。詳しくいうと，国際陰謀団の首領で科学者のレッド公なる危険人物が登場する。このレッド公の陰謀によって，素朴な天才科学者のロートン博士が人造蛋白質を合成し，主人公の人造人間ミッチイを作ることに成功するが，やがてレッド公によって殺される。ミッチイの持つ超能力は，ロートン博士が残した秘密書類の中で次のように示されている。

「ミッチイは，人間にも，動物にも，植物にも，鉱物にもあらず。人造細胞にて作られし人造人間にすぎず。

その体に仕かけたる多くの秘密装置により，ミッチイは十万馬力の超人力を発揮し，世界無敵たるべし……」

ミッチイはやがて両親探しの旅に出る。そして，ミッチイが会った悪魔の科学者レッド公を思わず父親と誤認する。だが，レッド公は「ハッハッハッハッ，お前に親なんかあるものか，お前は人造人間なのだからな！」，と冷たく突き放してしまう。これを聞いて，ミッチイはレッド公を憎み，人間社会を憎み，反逆を企てる。ミッチイはメトロポリスへ進撃し，地上で毒ガスを広めさせ，高層ビルを次々と破壊させた。だが，「人工黒点」の消滅とともに，人造人間ミッチイは力を失い，身体を溶かしてしまう。

そして，ミッチイの死とともに，ベル博士が最後の頁に再登場し，次のような言葉を発する。

「恐らくいつかは人間も，発達しすぎた科学のために，かえって自分を亡ぼしてしまうのではないだろうか？」

私は最近，書斎の戸棚の隅からボロボロになった名作「メトロポリス」を取り出し，それを丹念に再読してみた。そのとき，手塚漫画の独創性と先見性にあらためて驚かされたのである。この20世紀は科学技術が恐ろしく発達し，効率性と経済性が極度に推し進められた。だが，その代償として，人間社会は不安定になり，リスクに満ちみちたものになったのだ。「ハイリスク・ハイリターン」というが，人災リスクやモラル・ハザードが臨界点を超えて大きくなり過ぎたようである。

この新しい21世紀の日本社会は，20世紀の社会の単なるコピーを続けるのだろうか。もし仮にこのままの調子で事態が続行すると仮定するならば，我々は上述のベル博士の予言を漫画の中の話だとして一笑に付すことはできないだろうと思う。我々が新世紀を明るく希望の持てる世紀にするためには，思い切った価値転換をする必要があるだろう。

Ⅳ．2　「経済大国」から「生活大国」への価値転換

1995年の『国民経済白書』には，興味深いサブタイトルが付いている。そのサブタイトルとは，「戦後50年の自分史――多様で豊かな生き方を求めて」というものである。ここで，「多様で豊かな生き方」とは何であろうか。それは単に，単に経済的にゆたかな，つまり給料や俸給が大なる生活を意味するとは限らない。例えば，現在のようにテロに怯え，狂牛病に恐れ，炭疽菌にびくびくするような市民生活は，真の意味でゆたかな生活とは決して言えないだろう。「経済大国」と「生活大国」の間には，大きなギャップが存在するのだ。

「効率性」と「安全性」の間には，微妙なトレイド・オフの関係が存在するようだ。すでに述べたように，狂牛病は，牛の肉骨粉を別の牛の飼料にすることから発生し，蔓延した。これはある意味では，「牛の共食い」という方策に

訴えて，肉牛の増産を図ってきたようなものだ。このように，効率性を追及しすぎると，安全性がおろそかになりがちである。効率性はほどほどの所に押さえて，安全性の維持に全力を注ぐほうが，人々の生活が真の意味でゆたかになるだろう[9)]。

同じことが，化石燃料の浪費と地球温暖化の問題についても妥当する。わたしは長いアメリカ生活を体験し，大きな建物の全館冷暖房の快適さに圧倒されたことがある。だが，今になって冷静に考えると，建物のすべての部屋が同時に使用されていることはなく，全館冷暖房はあまりにも石油資源の浪費といえる。また，外気の気温が零下20度であるのに，ある学生寮の部屋の温度が30度を超えており，何と50度の温度差に体調が狂ったこともある。アメリカ生活の長い日本人の友人の見解によれば，初冬や早春の時節には，電気コタツのような日本式局部暖房のほうが気持ちがよいということである。でも，アメリカでは，季節に構わず，時間に構わず，エアコンが連日連夜ブンブンと回転している。

アメリカをはじめとする先進国が，現在のペースで化石燃料を浪費していくならば，地球温暖化の問題はますます深刻になるだろう。地球の温度が上がれば，南極の氷が溶け，氷河が後退することによって，海面は数メートル上昇するから，低地帯の国土は海面下に没するだろう。これは，ミクロレベルの効率性の追及が，マクロ全体の安全性を脅かしかねない好例である。

最近読んだ書物の中で非常に感銘を覚えたのは，弁護士中坊公平氏の著作『罪なくして罰せず』（1999年）である。次の文章は，21世紀の市民生活のありかたを考える上で，とくに示唆的である。

「弁護士や医者や牧師に限らず，どの職業にも競争や効率を上回る別の原理があるはずである。それを職業倫理の根本に据えてやっていけば，競争にも勝てると私は思う。矛盾しているように見えるかもしれないが，短絡的に目先の利益ばかりをかんがえるのではなく，もっ

9）単なる金銭的な裕福さだけでなく，精神的・文化的な「ゆたかさ」や「ゆとり」のあり方を総合的に研究する学問が，「生活経済学」と言われる分野である。詳しくは，原司郎・酒井泰弘編『生活経済学入門』を参照していただきたい。なお，私はかつて生活経済学会の会長職にあり，現在でも引き続き理事を務めている。

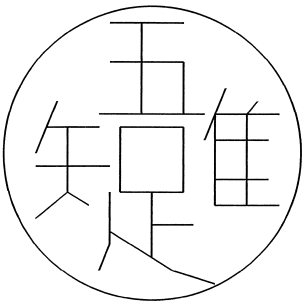
と長いスタンスに立って，倫理を改めていくことが大事なのだ。無論ジャーナリズムがその根本にすべき原理は，弁護士の場合と同じく〈人権〉である」

新しい21世紀は，どうやらリスクと不確実性の時代といえそうである。効率性と経済性の追及だけでは，安全性や公平性が十分に確保されず，社会はむしろ不安で不安定な状態に陥りがちである。このことを念頭において，私は最近，自著の署名を頼まれると，次のような文章を書くことにしている。

「吾，唯足るを知る」

実際の署名にあたっては，図表４が示すように，丸形に四角の穴の開いた「天保銭」をまず描き，次に「口」形の穴を利用して「吾」，「唯」，「足」，「知」を順次入れるようしている。

このような「知足精神」に従っておれば，すべての人間は奢らず，謙虚になるだろう。科学的な色々なリスク対策は，もちろん必要であろう。だが，それだけでは，決して十分ではないことを知らなければならない。われわれが人間社会に住むかぎり，最後の「決め手」はやはり人間自体の品格である。われわれ人間の心の持ちかたこそが，予知せざるリスクに備える究極の最善策であると堅く信じるものである。



図表４　「吾，唯足るを知る」の精神

後　記

本論文がこのたび，滋賀大学の碩学・原田俊孝博士のための退職記念論文集に掲載されるのを望外の幸運と光栄に感じるものである。

実は，本論文にはそれなりの歴史と因縁がある。その原型はすでに，筆者が５年ほど前に関東のＴ大学に勤務していた時代に脱稿していた。そして，出版の手はずまで整い，ゲラの校正刷りを２回まで行ったのであるが，出版社の突然の解散のために，原稿がいわば宙に浮いた状態に成ってしまった。リスクに関係する論文には，このように何らかの「出版リスク」が免れないようだ。そ

して今回，私は旧稿を読み直してみて，幸いにも適宜必要な改訂作業を行なうことができた。「禍転じて福となす」とは，まさにこのことであろう。

私自身は敬愛する原田教授とほぼ同年齢であり，滋賀大学研究棟の６階ロビーにて人生や世界の諸問題について清談を楽しむことが度々あった。現代のような「リスク社会」の激浪の中にあって，本論文が海の中の藻屑とならずに，こうして洋上に再浮上し，無事航行するチャンスを与えられたことに対して，私は衷心より感謝の言葉を申し上げたい。

「人生，至るところ青山あり」という。原田教授にも筆者にも，人生はまだまだ十分残っているのだ。更なる青山を目指して，お互いに奮闘努力を重ねたいものである。

参考文献

１）宇沢弘文『ゆたかな国を作る』，岩波書店，1999年.
２）酒井泰弘『不確実性の経済学』，有斐閣，1982年.
３）酒井泰弘『寡占と情報の理論』，東洋経済新報社，1990年.
４）酒井泰弘『リスクと情報――新しい経済学』，勁草書房，1991年.
５）酒井泰弘『リスクの経済学――情報と社会風土』，有斐閣，1996年.
６）酒井泰弘「経済学は不確実性をどう扱ってきたか」，『経済セミナー』，1998年１月号.
７）酒井泰弘「経済学におけるリスクの考え方――共感と血気の役割」，経済企画庁 EPS 誌，2000年６月号.
８）手塚治虫『メトロポリス（大都会）』，育英出版株式会社，1949年.
９）中坊公平『罪なくして罰せず』，朝日新聞社，1999年.
10）日本リスク研究学会編『リスク学事典』，TBS ブリタニカ，2000年.
11）広瀬弘忠「リスクの発想は定着したか」，エネルギー・レビュー，1998年２月号.
12）水島一也編著『保険文化――リスクと日本人』，千倉書房，1995年.
13）森嶋通夫『なぜ日本は〈成功〉したか』，TBS ブリタニカ，1984年.
14）森嶋通夫『なぜ日本は没落するか』，岩波書店，1999年.
15）山本七平［イザヤ・ベンダサン］『日本人とユダヤ人』，山本書店，1971年.
16）池田三郎・酒井泰弘・多和田真編著『リスク，環境および経済』，勁草書房，2004年。
17）酒井泰弘『リスク社会を見る目』岩波書店，2006年。